

## 書評

Ross G. Forman, *China and the Victorian Imagination: Empires Entwined* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013)



Timothy Clark, C. Andrew Gestle, Aki Ishigami, eds., *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art* (London: British Museum Press, 2013)



橋本 順光

今世紀に入ってから、近代英国と中国の文化交流史について多くの書籍が英語圏で刊行されるようになった。これは中国の発展と無縁ではあるまい。Formanは、結論でNiall FergusonのTV番組*China: Triumph and Turmoil* (2012)に言及して、「中国の世紀」を恐れるべきなのか、あるいは中国の自壊こそ恐れるべきなのかという、いかにもな問いを引用している。なるほど、Formanが巧みに対比するように、こうした問いは、旧植民地インドについてはまず発せられることがない。大英帝国にとって異質な存在であり、せいぜい辺境でしかなかった中国は、無視されるか過剰に警戒されるか、あくまで異物として認識されてきたということなのだろう。

しかし、中国と英国の関係はそんな単純なものではない。Formanの副題にあるように、両者は*Empires Entwined*といえる状態にあり、いわばそれらを解きほぐすような良質な研究が、最近、続々と登場している。それはむしろ旧英領植民地や英語圏出身の中国系研究者たち、さらには中国大陸出身の研究者たちが、人文科学の分野でも積極的に英米の大学院に進み、博士論文を執筆するようになった事情と密接に関係している。先駆け

は、上海出身で英国に学んだ Lynn Pann の *Sons of the Yellow Emperor: The Story of the Overseas Chinese* (1990) あたりだろうか。本書は『華人の歴史』として翻訳されたが、これまでアメリカへの移民に偏りがちだった研究に対して、南アフリカやオーストラリアといった大英帝国の広がりにも注意を促すこととなった。例えばサンフランシスコのチャイナタウンとロンドンのライムハウスを結びつけ、巨大な帝国間の交流と衝突の産物としてみ直す視座をもたらししたのである。こうした土台から、狭義の移民史研究にとどまらず、帝国の文化研究にも目配りした Rachel K. Bright の *Chinese Labour in South Africa, 1902-10: Race, Violence, and Global Spectacle* (2013) などが生まれたともいえるだろう。

中国側の資料や研究へ容易にアクセスできるようになったのも、大きく貢献したと思われる。近代英国における中国の表象研究といえば、Hugh Honour による *Chinoiserie* (1961) と Raymond Dawson の *Chinese Chameleon* (1967) を古典的研究として、その枠組みを塗り替える研究は長くなかったが、ここ5年の間に、一方的な英国の幻想というだけでは説明しきれない諸相について研究書が次々に現れた。19世紀後半には、清朝政府の崩壊が *Break-up of China* と、破碎する陶磁器になぞらえられたが、断片的な逸話か背景の置物であるかのように思われていた中国への言及や登場を、同時代の異国趣味や中国との通商などと結びつける試みは、文字通り中国という陶片から由来と物語を再現する作業を思わせよう。

シノワズリーと呼ばれる18世紀の中国趣味や20世紀のモダニズムとの関連についての研究書は省略するとして、19世紀前半だと、例えばラムが中国の焼き豚の起源について記した『エリア随筆』の一編を、彼が働く東インド会社と結びつけようとした Karen Fang の *Romantic Writing and the Empire of Signs: Periodical Culture and Post-Napoleonic Authorship* (2010)、18世紀のシノワズリーからの連続性を19世紀のディケンズの『エドウィン・ドルードの謎』にみる阿片窟までやや断片的ながら辿ろうとする Elizabeth Hope Chang の *Britain's Chinese Eye: Literature, Empire, and Aesthetics in Nineteenth-Century Britain* (2010)、そして斯界のほぼ決定的な研究となるであろう Peter J. Kitson, *Forging Romantic China: Sino-British Cultural Exchange 1760-1840* (2013) がすぐに思い浮かぶ。ヴィクト

リア朝中期以降に関しては、リリアン・ギッシュ主演でD・W・グリフィス監督の *Broken Blossoms* (1919) という、アメリカ映画研究ではつとに論じられてきた作品の英国の原作をその成立と文脈について詳述した Anne Veronica Witchard の *Thomas Burke's Dark Chinoiserie: Limehouse Nights and the Queer Spell of Chinatown* (2009)、そして今後の基本文献となるであろう Shih-Wen Chen の *Representations of China in British Children's Fiction, 1851-1911* (2013) が刊行された。後者は、中国表象を博搜するだけでなく、それらが上位文化の規範をそのまま反映せず、時に前進的ですからある多様性を発掘しており、理想的な児童文学研究ともなっている。

こうしたなか、ヴィクトリア朝文化研究を牽引する Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture の一冊として刊行されたのが、Ross G. Forman の *China and the Victorian Imagination: Empire Entwined*(2013) である。全体で6章から成り、19世紀後半から20世紀にかけて、英国は開港された中国をどのように描き、あるいは問題視してきたのか、小説から演劇まで多くの一次資料にあたった労作といえるだろう。

第一章は、条約港を舞台にした物語について、それらがインドやアフリカと違っていわゆる「雑婚」がタブーとされなかったことが指摘される。例えば清朝で洋関税務司を務めるなど大きな影響力をもった Robert Hart について、中国人女性との関係が公然の秘密として問題にされず、それをモデルにした小説が紹介される。第二章では、そんな「雑婚」をよく主題にした James Dalziel の小説に焦点が絞られる。なるほど香港を舞台にした「混淆」に関する物語の原点ともいべき作家であり、その再評価を位置づけた論文である。第三章では、いわゆる義和団事件をめぐる物語について、多様な作家の作品がパノラマのように総覧される。インドの *Mutiny* 物と異なり、そこにはヨーロッパの女性に対する性的脅威がほとんど描かれれないというのは興味深い。東洋人男性がアメリカに移住した際、従来、女性の領域とされた洗濯や炊事といった分野に進出したこともあり、ジェンダー規範を攪乱する女性的存在として表象されたとはいすでに多くの研究が指摘しているが、比較が可能な指摘だろう。第四章では、西洋世界を転覆しようとする架空未来戦記小説がとりあげられる。日本人を

父に、中国人を母にした Yen How が欧米を侵略する *Yellow Danger*(1898) を中心に関連の小説が論じられるのだが、ほかの章と違って、すでに I. F. Clarke の *Voices Propheying War*(1992) 以降、多くの研究が積み上げられた分野だけに、ここはやや新鮮味に欠ける章になっている。対照的に第五章は、中国がどのように演劇に登場し描かれたのか、これまでどの研究者もまともに論じなかった中国物を掘り起こしている。それらの演劇は、アラジンと魔法のランプ（実は『アラビアン・ナイト』では中国という設定である）のように奇妙で幻想的な舞台かその延長としてコミック・レリーフとして登場する中国人という類型と、階級ないし人種間の対立に引き裂かれる男女のメロドラマである柳模様物語 (*Willow Pattern Story*) 型とに大別できるという。最後の第六章は、イースト・エンドのライムハウス表象について、これまでの退廃一辺倒とは異なった側面に光をあてている。『エドウィン・ドルードの謎』以降の阿片窟表象を原型に、そのチャイナタウンは性と暴力の渦巻く「西洋の中の東洋」として描かれてきた反面、George R. Sims や Thomas Burke の作品を引いて、労働者階級の英国人女性と結婚する中国人男性の物語など、むしろ悪役は暴力的な白人男性であることに注目するのである。こうして、当初は香港などの大英帝国の条約港を舞台にした「雑婚」の物語が、帝都ロンドン内の事として描かれたことを指摘し、本書は閉じられることになる。

通読してすぐに気づかされるのは、日本との対比や関連である。たとえば、「雑婚」に対する抵抗がないという点は、おそらくヴィクトリア朝の日本についての表象でも指摘できるだろう。日本の場合、日本滞在中だけでなく、Edwin Arnold のように、おそらく Sir の称号を持つ英国人では初めて日本人女性（黒川玉）を妻として英国へ連れ帰った男性がいるくらいだ。演劇についての分析も、*Mikado*(1885) と *Geisha*(1896) を両極としてほぼ同様のことがあてはまるだろう。中国と日本が大きく異なることは言うまでもないが、研究書が両者を別物として扱うことで、ヴィクトリア朝当時であって中国と日本がしばしば混同されたことや、それゆえ中国観と日本観は一方がポジティブのときは他方がネガティブという相補的とさえいえる関係にあることは、やはり見過ごせないのではないか。*Yellow Danger* の主人公である Yen How が日中の「雑婚」によって生まれた存在

であることに本書はあまり注目しないが、英国におけるこうした日中の「雑婚」はもっと研究されてよいのかもしれない。

とはいえ、これはやや時期尚早に過ぎるのかもしれない。たとえばジャポニズムの分野を中心にして、ヴィクトリア朝と日本との関連は、これまで多くの研究書が刊行され、中国と異なる日本のインパクトが強調されてきた。Hugh Honour は *Chinoiserie* (1961) の最後で、ホイットラーらの作品に触れて、その混同と混淆ゆえに、日本趣味が中国趣味の延長にあることを指摘したが、その後の研究は、どちらかといえば連続性を否定する傾向にある。むしろ断続性に注目することで、単なる異国の事物を描いた異国趣味ではなく、浮世絵なり俳句なり、題材ではなく方法を援用した点が強調されてきたといえるだろう。同じようにして、英国と中国に関する研究も、まだ当分は中国単独の影響や独自性を研究する必要があるのかもしれない。あいにく本書には収録されていないが、Forman には ‘Eating Out East: Representing Chinese Food in Victorian Travel Literature and Journalism’(2007) という中華料理の表象に関する好論文があり、これだけでも今後、一冊の本が書かれる必要があるだろう。

それまでのあいだ架橋となる視点を与えてくれるのが、絵画や文学中心のジャポニズム研究で、ややおざりにされてきた工芸品の研究である。Collins の *Moonstone* 以降、植民地から略奪された宝が怪奇現象とともに奪還されようとする物語が書きつがれたが、中国や日本の工芸品についてもそんな曰くつきの物語は多い。最近、日本でも輸出工芸の復権と出版が盛んになったが、海外における最大級ともいえる英国の Khalili コレクションの一部が、豊富な図版と論文とともに *Japonisme and the Rise of the Modern Art Movement: the Arts of the Meiji Period* (2013) にまとめられた。同コレクションは 1994 年に同朋舎から豪華本が刊行されたが、高価なこともあり入手が難しく、一部とはいえ入手が容易になったのは喜ばしい。横溝廣子論文を筆頭に、ヴィクトリア朝における展示と受容についての研究は、小説などの描写を考える点で大いに示唆に富む。

そういえば *My Idealed John Bullesses* (1912) にて、Yoshio Markino こと牧野義雄は、サウス・ケンジントン美術館で「明珍」の鷹を前に逸品の流出を嘆く日本の友人に対して、ここに展示されたおかげで世界中の人々の

目に触れられるようになったことの意義をむしろ強調した。これは居住する英国へのある種の媚態ではあるのだが、それこそそんな女性的な東洋人男性のステレオタイプを、少なくともその書物においては、牧野は擬態するところが多々あった。その点で牧野が *Yellow Danger* の著者 M.P.Shiel の友人であり、そのためだろう Markino という男が登場する日露戦争小説 *Yellow Wave* (1905) を Shiel が刊行している。些細な例であるが、今後、ヴィクトリア朝英国と東アジアがどのように関わり、どんな副産物をもたらしたのか、そんな研究のための一エピソードになるかもしれない。

工芸以上に、ジャポニズムの研究がこれまであまり立ち入らなかったもう一つの分野が春画である。ピアズレーを例外として、ヴィクトリア朝の英国で春画がどのように流通し、影響を与えたのかは、これまでほとんどまともに論じられてこなかった。大英博物館での「春画」展は日本でもよく紹介されたが、その浩瀚なカタログ *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art* (2013) において注目すべきなのは、それらの受容を論じた Ricard Bru 論ではないだろうか。既に著者は、*Secret Images: Picasso and the Japanese Erotic Print* (2010) でピカソへの影響を指摘して斯界を驚かせたが、あわせて *Erotic Japonisme: The Influence of Japanese Sexual Imagery on Western Art* (2013) を刊行するなど、これまで抜け落ちていた春画の影響について、目下、精力的に研究を進めている。やや牽強附会に思えないところもないではないが、少なくとも春画の所蔵来歴の調査は資するところが大きい。例えば牧野の友人であった詩人の野口米次郎は、『画壇の人人』(1927)で、おそらく20世紀の初頭だろう、北斎のコレクターでもあった画家の Charles Haslewood Shannon の家を訪問すること数回におよび、「彼の所謂 naughty pictures なる春画の蒐集を私に見せるに至った」と記している。そのなかの一つはゴンケールの旧蔵だったという。今回、Bru 論文を読み、大英博物館の春画コレクションの一部は、元を辿ると Shannon に行き着くということを知った。今後の調査によっては詳細が明らかになるかもしれない。

しかし、これは些末な考証にすぎまい。Bru の指摘でもっと示唆に富むのは、19世紀西欧でもっとも有名だった春画である北斎の『喜能会之故真通』(1820年頃刊行)の意外な流通と影響だ。今回の春画展では、絵の



解説はもちろんのこと、そこに書き込まれた台詞を英訳し、春画の重層性を初めて英語圏に紹介したことが画期的だった。一方、この海女と大蛸を組み合わせた絵について Bru が注記するのは、背景の台詞がなまじわからなかったため、海女は苦悶の表情を浮かべていると当時の多くの画家が誤解した点である。いったいヴィクトリア朝研究とどのような関係が思われるかもしれないが、この図像は、19世紀末の挿絵や風刺画で多く描かれる女性に触手をからませる蛸に影響を及ぼしたか、すくなくとも触発した可能性があるのである。

そもそも人を襲う蛸という主題は、西欧では怪物クラークンに由来するが、大きく広めたのは Victor Hugo の *Les Travailleurs de la Mer* (1866) といわれる。これは同年に *The Toilers of the Sea* として英訳され、蛸が人の血を吸うという俗説は、その後、英国でも長く繰り返された。その一つこそ、ウェルズの『宇宙戦争』(1898)の吸血蛸こと火星である。この1906年のフランス語版に、Henrique Alvim Corrêa が挿絵を描いたが、そこでは北斎を思わせるように蛸が触手を女性の身体に絡ませている。Bru は、Corrêa に北斎の残響を指摘しているが、たしかに従来の攻撃的だけではない描写には、北斎の春画の影響がよみとれよう。19世紀の後半には中国系移民の脅威を蛸になぞらえ、触手を女性に巻き付ける図像が頻出するが、たとえばその筆頭 ‘The Mongolian Octopus-His Grip on Australia’ (1886) なども、ひょっとすると北斎あたりに触発されたのではないかと思えてくる。とはいえ、深読みは禁物だろう。先の野口米次郎は、「日本の春画がどの位西洋の美術に日本の芸術に対する彼等の憧憬心を高潮せしめるに助けたことであろうか」と冷静に分析している。それに当時の英国の出版物では間接的にしか描けず、影響を指摘するのは困難だ。例えばピアズレーがモデルというアーサー・シモンズの「ピーター・ウェイデリンの死」(1905)では、貞奴や青楼の女に言及しても、それらしい記述は一切ない。

これまで見てきたように、今後も、近代英国における中国の表象をめぐる文化研究は、時に玉石混淆しながら、いっそう進展してゆくだろう。一方、ジャポニズムや日英交渉史では、すでに多くの先行研究があり、やや勢いに欠けることになるかもしれない。ただそれは日本からの発信やプレゼンスの減少というよりも、両者を組み合わせ、東アジアとヴィクトリア

朝英国の研究へと総合する機が熟しつつあると考える方がよいのではないか。この拙い一文は、書評の形をかりて昨今の研究史と Forman の研究書のアウトラインをなぞりながら、そんな可能性を探ろうとした試みにほかならない。